

広島的女性作家・岡田（永代）美知代研究（1）

―研究の現状と課題―

有元 伸子

岡田（永代）美知代は、広島県甲奴郡上下村（現・府中市上下町）出身の女性作家である。明治末から大正期にかけて、小説や翻訳のほか、少女小説も多く手がけている。一九一七年（大正六）、花にまつわる古今東西の挿話を編集し、小学校の副読本としても使われた短編集『花ものがたり』を刊行して、ロングセラーとなった。ストウ夫人の「アンクル・トムズ・ケビン」の日本初訳『奴隷トム』（一九二三年（大正一二）、成文堂）や、ミューラック夫人「ジョン・ハリファックス」の翻訳『愛と真実』（一九二四年（大正一三）、成文堂）なども、美知代の仕事である。

しかしながら、不幸にも、岡田美知代の名前は、当初から彼女自身の仕事とは異なった面から記憶されてきた。すなわち、田山花袋の小説『蒲団』の女主人公・横山芳子のモデルとしてである。花袋没後、前田晃は、「田山さんには二十四五年前から常に影に添ってゐた一人の女性がある。その女性の存在によつて幾つかの傑作が生れ、愛慾観が出来、その人生も成立つたといつてもいゝとわたしは思つてゐる」と追悼した。花袋は、美知代をモデルとして、『蒲団』のほか、「妻」のてる子、「縁」の敏子などを造型したが、これら花袋作品が美知代のスキヤングラスなイメージを形成し、彼女の生や作品を規定するコードとなつてしまつた。事実を書くとき一般に信じられた「自然主義作家」花袋によつて塗り込められた美知代像は広く伝播し、その呪縛はなかなか解けることがない。

論者は、二冊の事典の項目執筆を機に、広島近代女性作家の草分

けの一人としての岡田（永代）美知代と遭遇した。現在、広島県内にあつても美知代の存在はほとんど知られていない。作品を手近に読む機会もなく、花袋研究の文脈で触れられるばかりで、彼女自身の研究は乏しい。しかしながら、書くことにこだわり、「青鞥」同人たちとは重なりつつも異なつた文脈で「新しい女」として生きようとした生身の美知代の姿はなかなか魅力的であるし、残した作品も多様で、意外な深度を持つている。もつと享受されてもよい作家なのではないか。また、師であつた田山花袋との関係や感情も複雑かつアンヴィバレントで、もう少し丁寧にジェンダーの視点から美知代に寄り添いつつ捉え直すべきであろう。なにより、伝記にも作品読解にも未解明の空白部分が多に多い。

忘れられた作家といつた現状ではあるが、しかし、岡田（永代）美知代を読む気運は高まつている。現在第二巻まで刊行中の『新編 日本女性文学全集』（青柳堂）の次回配本には美知代の二作品（ある女の手紙、「一銭銅貨」）が収録予定であり、一般読者が美知代作品に触れる機会増加が期待される。また、美知代の生家は上下町が取得して改修し、二〇〇三年（平成一五）に上下町歴史文化資料館として開館（現在は、府中市上下歴史文化資料館）。美知代の未発表原稿などの資料を収集・展示し、企画展を開催するほか、花袋が上下町を訪ねた折に宿泊した部屋や礼状も保存公開されるなど、文学者・岡田美知代とその文学の普及を図っている。論者は資料館と連携協力して、書誌事項が不明の作品調査を始め、美知代の生前未発表原稿の翻

刻などを通じて、成果を広く還元したいと考えている。

本稿では、これから岡田（永代）美知代の研究を継続して進めていく始発点として、研究の現状と今後の課題を整理しておきたい。本研究は、メディア研究、地方史、女性史などの分野とも密接に関わってくるだろうが、論者はこれまで三島由紀夫を中心とする戦後文学やジェンダー学を主要なフィールドとしており、明治・大正期の文学・文化状況や広島地域性・歴史に関する知識や技能は十分ではない。ご教示・ご修正をいただきつつ、調査・考察を進めていきたい。

一 岡田（永代）美知代の生と創作

はじめに、美知代の生涯を概括する。

岡田美知代は、一八八五年（明治一八）四月一〇日（一八日説も）、広島県甲奴郡上下村（現・府中市上下町）に生れた。岡田家は、田畑山林を多く所有する豪家であり、金融業も営んでいた。父・胖十郎は、備後銀行の創設者の一人であり、後年には県会議員や上下町長を務めるなど町の名士で、一八九七年（明治三〇）、町制施行により上下町が誕生した時点で、町内第四位の多額納税者であった。母・ミナともども、熱心なクリスチャンで、一八九六年（明治二九）、上下町にキリスト教講義所を作り、その廃止後も町内の伝道に尽力した。胖十郎と親しい角倉家の土蔵を改築して造られた上下キリスト教会は、岡田家の至近にあり、現在も町のシンボルとなっている。

美知代は五人兄弟の長女（長兄・実麿、次兄・束稲、弟・三米、妹・万寿代）。長兄の実麿は、アメリカ留学後、神戸高等商業学校や第一高等学校（夏目漱石の後任）の教授となった著名な英文学者であり、後年には、上下町の実家と花袋、美知代、永代静雄との間にあって調停も行った。

美知代は、上下小学校卒業後、一八九八年（明治三一）神戸女学院

に入学、十七歳で洗礼を受ける。一九〇三年（明治三六）、本科三年次に田山花袋に書簡を出して入門を懇願。数度の書簡往復のあと、入門が許された。翌年二月に神戸女学院を中退し、父・胖十郎に付き添われて上京。はじめは牛込区若松町の花袋宅に寄宿し、その後、花袋の妻りさ（里さ・利佐子）の姉・浅井かくの家（麹町区土手三番町）に転居して、津田英学塾予科に通学。

一九〇五年（明治三八）春から体調不良で一時帰省していた美知代は、八月、神戸教会の夏期学校において、かねて見知っていた同志社神学部の学生・永代静雄と親しくなる。九月の上京の途次、京都で落ち合った永代と膳所を遊覧したが、これが花袋と実家に発覚。永代も上京したため、花袋は美知代を義姉の家から自宅に戻し、父・胖十郎と善後策を相談した。翌一九〇六年（明治三九）一月、美知代は上京した父親に連れられて上下町に帰郷。失意の帰郷であったはずだが、翌々年に再上京するまでの二年三カ月の上下町での生活の間に、これまで確認できただけでも二六編の作品が雑誌に掲載されている。花袋に弟子入りして東京で過ごした二年弱の期間には、「中学世界」や「女子文壇」に投稿はするものの、「中学世界」に和歌が掲載された程度であったにすぎない。「蒲団」が、帰郷させられた女主人公・芳子について「すぐれた作品一つ得ず、かうして田舎に帰る運命かと思ふと、堪らなく悲しくならずには居られまい」と書いたのは、あながち虚辞ではないのだ。ところが、東京での激烈な体験のあと上下町に戻り落ち着きを取り戻すと、美知代の筆は加速する。花袋が創刊した「文章世界」創刊号に「葉女史」の名で発表した「戦死長屋」を皮切りとして、「新声」「文藝倶楽部」「新潮」「実業之横浜」といった雑誌に美知代が意欲的に作品を発表し始めるのは、実にこの帰郷以降なのだ。

美知代が帰郷した年の一〇月、山陰旅行の途上の花袋が上下町の岡田家に二日滞在し、後年「備後の山中」で叙情的に回想される（『日本一周』中編、一九一五年（大正四））。翌一九〇七年（明治四〇）九月、花袋が自身と美知代・静雄をモデルにして「蒲団」を発表、女弟

子への片思いと性欲を描いた内容が大きな反響をよびおこす。ゴシップの渦中におかれた美知代は、手記を発表するかたわら、創作と投稿を続けた。「女子文壇」一九〇八年（明治四一）四月臨時増刊号「文壇の花」特集では、短篇小説「侮辱」で天賞を受賞し、巻頭に肖像写真も掲載されている¹⁰。

一九〇八年（明治四一）四月、美知代は二年三カ月ぶりに再上京して、白山御殿町の兄・実厩宅に住むが、同年九月、妊娠したことを知って九十九里に隠れ住む。二月には牛込区原町で永代と同居。これを知った実家の意向により、一九〇九年（明治四二）、形式的に田山花袋の養女となり、永代静雄と結婚披露の通知状を出す。永代は「中央新聞」に移籍。三月二〇日には長女・千鶴子が生れた。この年の五月以降、筆名を「岡田美知代」から「永代美知代」と改めている。一月には永代と別れて、千鶴子を連れて田山家に戻り、四月から花袋の内弟子となっていた水野仙子（服部貞子）と代々木初台の家で共同生活を始める。

一九一〇年（明治四三）、長女・千鶴子を、花袋の妻りさの兄・太田玉茗の養女として入籍。千鶴子と水野仙子とともに、二月に仙子の故郷福島県の飯坂温泉で一カ月暮らし、三月に太田玉茗が住職をつとめる建福寺（埼玉県羽生）に一カ月滞在して千鶴子を慣らしたあと、千鶴子を置いて東京に戻った。四月二〇日、仙子と暮らす代々木初台の家を出て、永代と復縁し、「富山日報」の記者となった永代と共に富山に移った。このあたりの経緯は、花袋の「縁」（『毎日電報』一九一〇年三月〜八月）や、この記述に反論・対抗する形で書かれた美知代自身の「ある女の手紙」（『スバル』一九一〇年九月）、「里子」（『スバル』一九一〇年一〇月）、「岡澤の家」（『ホトトギス』一九一〇年一二月）、あるいは水野仙子「氷柱」（『新小説』一九一三年三月）などに文学化された。

一九一一年（明治四四）三月五日、長男・太刀男が誕生するも、同年六月三〇日、養女に出した千鶴子が、脳膜炎のために二歳で死去。

七月、傷心をいやすために、永代とともに大分県別府で療養して、二月に上京した。一九一二年（明治四五）大正元、永代静雄は、秋に東京毎日新聞社に入社し、二月には「不思議の国のアリス」の翻訳書「アリス物語」（紅葉堂書店）を刊行した。一九一七年（大正六）二月に田山家と協議離縁して上下町の岡田胖十郎の戸籍に復籍し、翌三月に永代の戸籍に入籍している。永代は、毎夕新聞社の社会部長、編集局長にまで昇進したが、一九一九年（大正八）、毎夕新聞社を退社して、新聞研究所を設立した。

美知代は、最初に子どもが誕生した一九〇九年（明治四二）から少女小説を書き始め、大正期に入ると、「少女世界」「少女の友」「ニコニコ」「家庭バック」「少年倶楽部」などの雑誌に少女小説・童話・歴史小説や軽い読み物を量産し、「オリバーツイスト」やアルフォンソ・ドウデーといった海外文学や「落窪物語」などの古典の紹介も行った。「花ものがたり」「奴隷トム」「愛と真実」など五冊の創作や翻訳書の刊行も大正期のことである。出産育児の体験を経て子どもに関心をもったのか、あるいは売文による家計補助の側面が大きかったのか、ともかく書き手としての需要は途切れることがなかった。美知代の少女小説については各種文学事典にもほとんど記載されており、評価はこれからである。

一九二六年（大正一五）、永代静雄と別れ、太刀男を連れてアメリカに行き、カリフォルニアで成功をおさめた従姉妹の福井千恵と親しくした。この渡米は、「主婦の友」特派記者としてだと説明されることが多いが、広津和郎が仲介して実業之日本社から派遣されたという説もあり、実情は不明である¹¹。永代との離縁や渡米の動機についても、性格の不一致や、生活苦、永代の深酒に嫌気がさして禁酒国アメリカに向かったなどの諸説があるが、はっきりしない。渡米の翌年、結核にかかった太刀男が單身帰国して、父の永代に引き取られる。永代は、その年に大河内ひでと再婚。美知代も、時期は未詳だが、アメリカで知り合った佐賀県出身の花田小太郎と再婚した。

太平洋戦争が始まる直前の一九四一年（昭和十六）三月、花田とともに帰国。すでに、師・田山花袋は一九三〇年（昭和五）五月、喉頭ガンのために死去しており、長男・太刀男も一九三二年（昭和七）五月、数え年二十二歳の若さで亡くなっていた。美知代夫妻は、帰国当座は親族の一人・岡田六一を頼って広島市に暮らしたが、翌一九四二（昭和一七）、亡くなった妹・万寿代の嫁ぎ先である八谷正義の家（広島県庄原市川北町）に移った。八谷正義は、東北帝国大学農学部出身で、欧米に留学後、台北帝国大学や北海道帝国大学で教え、戦後は長く庄原市長を務めた人物である。翌年、美知代夫妻は、同じ庄原市川北町大神宮境内にある八谷家の別邸に移居、ここが終の住処となる。一九四四（昭和一九）、前夫・永代静雄が死去し、美知代は永代の戸籍から除籍した。一九五七年（昭和三二）一月、夫の花田小太郎が死去。

一九五八年（昭和三三）には、「花袋の『蒲団』と私」（『婦人朝日』、七月一日）、「私は『蒲団』のモデルだった」（『みどり』、一〇月）の二つの手記を発表（いずれも「永代美知代」名）。帰国後も日課として英語の勉強を続けた。晩年の美知代と親しくした原博巳が美知代から英語を習い始めたのは、この頃からであった。一九六八年（昭和四三）一月一九日、老衰のため八十二歳で死去。

二 研究の現状と課題

（一）岡田（永代）美知代研究の必要性

岡田（永代）美知代は、日本近代文学史上で画期となった花袋の「蒲団」の女主人公・横山芳子のモデルとして強大なフィルターのもとで扱われ、小説家・翻訳家としての彼女自身に言及されることは極めて少ない。長年「蒲団」をはじめとする花袋作品の（随ったミュー

ズ）というフィルターを通して見られてきた美知代を、一人の女性・作家として復権させることが、研究の大きな目標となる。例えば、「蒲団」や「縁」に書かれた出来事についても、地方出身の女性が、師に入門を懇願して上京し、作品を執筆し始めた矢先に、師の作品のモデルとしてスキヤングルの渦中におかれる経緯を、花袋研究の側からではなく、美知代の作品や評伝に関する資料を探るにより、テクスチュアル・ハラスメントを受けた美知代の側から把握し直していく姿勢が求められよう¹²。

また、女性職業作家成立の過程を検討する先行研究にリンクしていくことも可能である。

日露戦後期の明治四〇年前後は、飯田祐子が説いたように、ホモソーシャルな読者共同体の形成を背景として、文学が男性ジェンダー化していく時期であった¹³。こうした時代において、女性がいかに作品を書き、作家として身を立てたかの検討は、一九九〇年ごろから、「青鞥」「女子文壇」などのメディア研究や「少女世界」「少女の友」掲載の少女小説の享受研究として盛んに行われ成果をあげている¹⁴。このような有名・無名の投稿者たちを群として扱う文化的な研究と同時に、平塚らいてう・田村俊子ら厚い批評を持つ一部作家以外の女性作家を通時的に検討していく必要があるだろう。

こうした観点から、富山出身の小寺（尾島）菊子の研究を金子幸代が行い¹⁵、福島出身の水野仙子の研究に根岸泰子を取り組んでいる¹⁶。岡田美知代は、まさに小寺菊子や水野仙子と同時期に「女子文壇」に投稿している¹⁷。美知代は、花袋門下の妹弟子に当たる水野仙子と一時期同居したことがあり、長女・千鶴子を養女に出す際にも同伴していた。徳田秋声門下の小寺菊子とは、「少女世界」で頻繁に同号に作品を掲載させている。美知代は菊子や仙子と違って「青鞥」には参加していないが、「新しい女」だと自認しており、その内実の解明が課題となる。美知代研究は、金子・根岸らによる同時代の女性作家研究や、「青鞥」「女子文壇」などのメディア研究・少女小説研究とリン

クさせることにより、明治末から大正期にかけての女性職業作家成立の過程や同時期の女性作家同士の関係解明に寄与するはずである。

(2) 伝記の整備・解明

研究を始めるにあたり、まずは資料探求や近親者へのインタビュー実施により、未解明な部分が多い美知代の年譜を埋めなくてはならない。

花袋の強大なフィルタを排して、美知代自身を評価していく重要性を先述したが、とはいえ、田山花袋研究の蓄積は厚く、美知代に關しても重要な資料や指摘が多い。群馬県館林市が刊行した『研究叢書第二卷「蒲団」をめぐる書簡集』は、とりわけ重要である¹⁸。これ

は同市田山花袋記念館が所蔵している田山花袋・岡田美知代・美知代の家族・永代静雄らの書簡を翻刻した資料編に、花袋研究の第一人者・小林一郎の解説を加えたものである。書簡集の刊行により、『蒲団』発表以来議論されてきた事実と虚構がかなり明瞭になってきた¹⁹。また『田山花袋記念文学館研究紀要』や『花袋研究学会々誌』にも、岡田美知代の書簡や未発表原稿の翻刻のほか、研究論文も掲載されている²⁰。『田山花袋「蒲団」作品論集成』全三巻も、『蒲団』発表直後の評から近年までの批評・研究が収集されて便利である²¹。これら花袋研究の成果は、花袋門下に入り「縁」に書かれることになる時期前後までの美知代を知るための、最も基本的な資料だと言えよう²²。

ともかく、美知代と花袋の關係はひとすじなわけでは解けない。美知代は『蒲団』発表後の手記でも、戦後に書かれた原稿でも、花袋について「恩は恩、怒みは怒み」と繰り返している。精神的な確執が相当あったと思われる時期にも両者は交際は続けており、少女小説の量産期にも美知代の作品発表のかなりが花袋の關係した博文館の雑誌に掲載された。「恩」と「怒」が幾重にも交錯する二人の關係は、相互の伝記的事項と作品を丁寧に関わらせて読み解かねばならない。

『蒲団』をめぐる書簡集』によって知られる時期以降については、永代と結婚してからの明治末から大正期の動きや、アメリカ滞在期、帰国後の庄原時代など、伝記上の空白が大きい。

このうち、永代静雄との結婚生活期に関しては、永代静雄研究による解明が参考になる。大西小生は、『不思議の国のアリス』の翻訳者としての永代静雄を詳細に検討しており、美知代・花袋ほか静雄の周辺人物に關しても精査している²³。扱う時期は限定されるが、末尾の年譜には従来ほとんど触れられていない美知代の少女小説も記載され、参考文献一覧も貴重である。また、石井茂が、若山牧水と美知代の交友關係を調査報告している²⁴。前項で触れた女性作家たちとの關係に加え、広く同時代とともに過ごした文学者の関連資料から美知代の動向を探っていく必要がある。

永代静雄との離婚の理由や渡米の経緯、アメリカで再婚した花田小太郎に關してはほとんど不明で、今後の大きな課題である。日米開戦の直前に花田と帰国した美知代は、庄原市で晩年を過ごした。この庄原時代については、美知代に英語を学び、身近で見守ってきた原博巳が彼女の生活・生活や発言を記している²⁵。国木田独步、若山牧水、安成二郎、吉川英治、神近市子など、美知代が好んで回顧した文学者名があげられており、東京時代の美知代の交友を復元していく手がかりとなる。また、後述するように、原は美知代の残した資料を上下歴史文化資料館に寄贈するなど、美知代の資料保存と再評価に大きな役割を果たしている。

(3) テクストの整備と評価

岡田（永代）美知代研究の基礎として著作リストは必須であるが、時期を限ったものは幾種かあるものの全体はカバーされていない。論者が作成中の美知代作品リストもまだ未整備で公開できる段階にはないが、早い時期に公開し、修正を受けつつ補訂していきたいと考えて

いる。

生前の美知代は、作品掲載誌から自作の部分だけを切り取って保存していた。美知代の没後は、晩年の美知代と親しく交流した原博巳が保存していたが、上下歴史文化資料館の開設とともに館に寄贈し、これをもとに資料館では「岡田（永代）美知代作品集」①②③を作成した。ただし、作品の現物はあるものの、掲載雑誌名や巻号・発表年月が不明なものが多い。論者は、資料館と協力連携して書誌事項の調査を進めているが、美知代自身が保存し「作品集」に納められた作品は、美知代の著作の半数にも満たない。花袋研究や永代静雄研究によって判明している作品に加えて、美知代が執筆した可能性のある雑誌をしらみつぶしに当たって、リストを補強していく必要がある。

今後、新資料が出る可能性もあるが、これまでのところ、美知代の創作活動は一九二六年（大正一五）の渡米までであり、アメリカ在住時のものや帰国後に手記以外で雑誌掲載された作品は確認できていない。したがって実質的な美知代の創作活動は明治・大正期であり、それは次の三期に分けられよう。

- (1) 習作期……上下町在住の一九〇二年（明治三五）から、花袋門下に入り東京、永代静雄との関係が発覚して上下町に帰郷するまでの一九〇五年（明治三八）まで。和歌や叙事文が中心。
- (2) 「岡田美知代」としての執筆期……一九〇六年（明治三九）の帰郷から、一九〇八年（明治四一）の再上京と永代との同居まで。「文章世界」「新声」等への短編小説投稿。
- (3) 「永代美知代」としての執筆期……一九〇九年（明治四二）の長女出産から、一九二六年（大正一五）の渡米まで。少女小説の量産。随筆集や翻訳書の出版。

このうち(2)の時期は、さらに、花袋の「蒲団」刊行（一九〇七年（明治四〇）九月）の前後で区切られる。「蒲団」刊行の余波が作品の内容に及び、(3)の時期の「ある女の手紙」「里子」などの私小説的な作品とゆるやかにつながっていく。

現在までに判明しているかぎりでは、美知代は、大正期に、翻訳を含めて単著を五冊出版している²⁸。雑誌掲載作品は、短編小説・少女小説・歴史小説・和歌など、およそ一五〇編。うち約半数が、少女少年雑誌に掲載されている。ほかに、インタビュ어나戦後に書かれた手記類。本文掲載はないが、投稿雑誌の講評に作家・作品名が記された投稿の事実が知られるもの。作品数は、今後、調査が進展すれば、さらに増加するはずである。また、生前未発表の原稿も、府中市上下歴史文化資料館と田山花袋記念館に残されていて、うち数作は翻刻されているが²⁹、未翻刻作品の公開が待たれる。

このように、まずは著作リストを完成させ、作品を収集することが大前提であり、その上で作品の読解や評価へ踏み込むことになる。詳細な作品論としては、光石亜由美の「自然主義の女―永与美知代「ある女の手紙」をめぐって」がほぼ唯一のものである²⁸。「ある女の手紙」は、美知代の花袋への葛藤が表現されたもので、評価的にも美知代作品の心理描写を検討するうえでも見逃せない作だ。しかし、美知代には、他にも、女学生同士の関係を軸とするなど女学生のハイカラな文化を体現したもの、広島や神戸の地域性の色濃いもの、自らの出自・社会階層に対する強いプライドがうかがわれるもの、社会的弱者への視線と正義感の強さが覗くもの、量産された少女小説など、多様な作品がある。厳密な枚数規定をもつ雑誌への投稿で技術を磨いた美知代の作品は、種々の要素を短い枚数に盛り込み多義的に読める可能性があるのだ。

たとえば、花袋の「蒲団」から半年後に発表された「侮辱」（「女子文壇」一九〇八年（明治四一）四月臨時増刊「文壇の花」の短編小説・天賞受賞作）は、神戸女学院の親密な女性同士の関係を東京に移したものである。一見、女学生同士の同性愛的な関係に男性が加わる三角関係の顛末を、関西方言を交えながら達者に描いた作品に映る。だが、年長女性が自分には「監督の責任があります」（折角父様から頼まれて、万一の事が有って御覧なさい、お郷里にたいして申訳ない

ぢやありませんか」と自らの嫉妬を正当化し、年少女性が「墮落の恐れ」があるために他家に預けられる展開は、花袋―美知代―永代の三角関係を彷彿とさせる。「侮辱」の詳細な分析は別稿に譲りたいが、「永代美知代」名で書かれた「ある女の手紙」や「蒲団」「縁」及び私」以前の、「岡田美知代」時代の作品にすでに花袋への批評が寓意として忍び込まれていたのである。短い枚数に巧みに内容を盛り込む美知代の手腕は優れており、読み解かねばならない作品は多い。

さらに、広島県の女性作家の先駆者としての岡田（永代）美知代の存在も重要である。明治から昭和期を通じて活躍した広島出身の女性作家として劇作家の岡田八千代がいるが、八千代は三歳のときに一家で上京して、広島島の風土性とは交わらない。したがって、美知代が、後続する林美美子や大田洋子、横山美智子など、広島県に関わる女性作家の先駆ということになるだろう。

美知代は広島をどのように描いたのか。花袋宛書簡には広島島の観光案内や鞆津・仙酔島での海水浴に関する記述があり、創作には、上下町のキリスト者迫害や山番の生活をモチーフとするもの、広島方言が多用されているものもある。上下町は、福山から瀬戸内海へ流れる芦田川と三次を経由して島根から日本海へ注ぐ江の川の分水嶺でもあり、備後の瀬戸内海地域と備北地域の間位置している。石見銀山からの銀を瀬戸内へ運ぶ銀山街道沿いの宿場として栄えた町で豪商も多く、岡田家もその一つであった。キリスト教を信仰する裕福な生家でお嬢様として暮らし、加えて神戸女学院仕込みのハイカラな女学生文化を体現した美知代のイメージと、花袋が「蒲団」や美知代の実家を訪ねた旅行記「備後の山中」に定着させた寂しい「山の中」のイメージには径庭がある。相互の比較や、花袋の上下町表象が美知代のそれに及ぼした影響についても今後の課題である。

以上、本稿では、岡田（永代）美知代研究を始発するにあたって、現状と今後の課題を整理してみた。美知代に関しての情報や資料をお

寄せいただければ幸いである。

注

- 1 「報知新聞」一九三〇年（昭和五）五月一四日↓「明治大正の文人」砂子屋書房、一九四二年
 - 2 伊藤整「日本文壇史」も花袋と美知代の関係にかなりの紙数を割いているが、花袋に近い資料に依っている（11 自然主義の勃興期）
 - 3 「14 反自然主義の人たち」講談社、一九七二―七三年。
 - 4 「岡田美知代―田山花袋「蒲団」のモデルの素顔は？」（広島県の不思議事典）新人物往来社、二〇〇四年）、「岡田美知代」（広島県現代文学事典）勉誠出版、二〇一〇年）
 - 5 美知代の残した創作の全貌を見通さないうまま、「恋愛と、それに続くモデル騒動の中で才能を開花させることなく終わった」（岡田美知代）『現代女性文学事典』東京堂出版、一九九〇年）といった否定的評価が下されてきた。
 - 6 本稿の校正時に刊行された。第三巻、吉川豊子編集、二〇一一年一月。同巻の所収作家は、大塚楠緒子・森しげ・岡田八千代・尾島菊子・水野仙子・国木田治子・小栗籬子・永代美知代。
 - 7 田辺良平「ふるさとの銀行物語（備後篇）」『備後銀行（青品郡府中町）―岡田美知代の父胖十郎が専務取締役』葺文社、二〇〇四年
 - 8 「上下町史 通史編」第五章第二節 地租改正と地主制 二〇〇三年
 - 9 「上下町史 通史編」第五章第四節 戦争と地域動向 二〇〇三年
- 伊藤整は、「その間に（引用者注・明治三十七年一月の上京から明治三八年四月に体調不良で一時帰省するまでの間）に美知代は短篇小説を五篇、長篇小説を一篇、その他美文や新体詩を数十篇書いて、そのあるものは、河井醉者の編輯してゐる「女子文壇」、博文館の「中学世界」、それから花袋の主催してゐる「文章世界」などに投

書して発表された」(『日本文壇史 11 自然主義の勃興期』注2)と書いている。「文章世界」が創刊されたのは明治三十九年三月で美知代の帰郷以降であるが、あるいは東京時代に書きためたものを帰郷後に投稿したのかもしれない。帰郷期間に掲載された作品には、上下町での見聞を素材としたり広島方言を使ったものもあり、その多くは帰郷後に創作されたのではないだろうか。

10 このとき、短編小説の地質が服部貞子(水野仙子)の「死」であり、美文の天賞は山田くに子(邦子)の「北の海」であった。

11 上下歴史文化資料館が主婦の友社に問い合わせたところ、当時の記者リストには名前が見当たらず、仮に社から派遣されたとしても非公式だった可能性が強いこと、美知代滞米期間の「主婦の友」にも美知代の署名記事は掲載されていない旨の返事であったという。

12 同時代の徳田秋江は、「最近また、一層直接に、女性の立場から、女性問題を取扱つてゐる作家が出た」として、「ニスパル」に「ある女の手紙」と「里子」とを書いた永代美知代」を評価している(『当今の女流作家』「文章世界」五一―五、明治四三年一月)。本稿校正時に刊行された大塚英志「妹」の運命―萌える近代文学者たち(思潮社、二〇一一年)は、「蒲団」と美知代の関係や美知代自身の著作にも紙数を割いている。

13 「彼らの物語」名古屋大学出版会、一九九八年

14 新・フェミニズム批評の会「青鞥」を読む(學藝書林、一九九八年)、「明治女性文学論」(翰林書房、二〇〇七年)、「大正女性文学論」(翰林書房、二〇一一年)

飯田祐子編「青鞥」という場―文学・ジェンダー・新しい女」森話社、二〇〇二年

飯田祐子「愛読諸嬢の文学的欲望―『女子文壇』という教室」(『日本文学』一九九八年一月)。

小平麻衣子「女が女を演じる―文学・欲望・消費」新曜社、二〇〇八年

金子幸代・中村真也「『新しい女』とは何か―一九一三年における『女子文壇』の文化史的研究」『富山大学人文学部紀要』四八、二〇〇八年

久米依子「構成される少女―明治期『少女小説』のジャンル形成」『日本近代文学』六八、二〇〇三年五月)

今田絵里子「『少女』の社会史」勁草書房、二〇〇七年

15 金子が継続中の小寺(尾島) 菊子研究はきわめて手厚く、方法的にも本研究が参照すべき点が多い。

「小寺(尾島) 菊子と『女子文壇』・『青鞥』―埋もれた女性職業作家の復権に向けて」『社会文学』二〇〇九年二月

「富山の女性文学の先駆者・小寺(尾島) 菊子研究」(1) (3) 『富山大学人文学部紀要』五一―五三、二〇〇九―二〇一〇年

16 「女性職業作家の形成―投稿家時代の水野仙子」『岐阜大学教育学部研究報告』五四巻二号、二〇〇六年二月

17 吉川豊子「日露戦時下における女性作家の登場と戦争物小説―投稿家時代の水野仙子・永代美知代と大塚楠緒子の初期作品」『社会文学』三二、二〇一〇年六月)が、戦争とジェンダーの視点から検討を加えている。

18 館林市教育委員会文化振興課、一九九三年

19 小谷野敦「岡田美知代と花袋『蒲団』について」『日本研究』三八、二〇〇八年九月

20 たとえば、宇田川昭子「資料ノート」岡田美知代の知られざる同人活動」『花袋研究学会々誌』二六、二〇〇八年三月)など

21 加藤秀爾編、大空社、一九九八年。美知代自身の「蒲団」に関する手記や、岩永眸、山内祥史などによる美知代や神戸女学院に関する調査、インタビューなどが再録されている。

22 加えて、小林一郎作成の田山花袋年譜も、美知代に関する情報が豊富である(『田山花袋研究―年譜・索引篇』桜楓社、一九八四年)。

23 「アリス物語」「黒姫物語」とその周辺」ネガ！スタジオ、二〇〇七年

24 「若山牧水「幾山河」の歌をめぐる」『国文学・研究と教育』風間書房、一九八七年

25 「晩年の岡田美知代―田山花袋「蒲団」モデル」(木精社、一九九二年)、「岡田美知代の素顔―田山花袋「蒲団」のモデル」(『梶葉』VI、一九九八年七月)、「第七章第二節 晩年を庄原で過ごした女流文学者岡田美知代」『庄原市の歴史 通史編』庄原市、二〇〇五年
26 いずれも「永代美知代」名で、「花ものがたり」(一九一七年(大正六)、「ゲーザル」(一九一七年(大正六)、「世界の三聖」(一九一八年(大正八)、「奴隷トム」(一九二三年(大正一二)、「愛と真実」(一九二四年(大正一三))である

27 「小夜子」(『蒲団』をめぐる書簡集』注18)、宮内俊介「(資料翻刻)「云ひ得ぬ秘密」(『田山花袋記念館研究紀要』一〇、一九九八年)、同「(資料翻刻)岡田美知代「女学生の恋物語」(『田山花袋記念館研究紀要』一二、二〇〇〇年)。「云ひ得ぬ秘密」は、原博巳「岡田美知代の素顔―田山花袋「蒲団」のモデル」(注25)にも翻刻掲載されている。

28 「名古屋近代文学研究」一七、一九九九年一月